
エウロパの旅人—日本再生篇

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの旅人―日本再生篇

【Nコード】

N0921Y

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

地軸のずれにより舞い上がった粉塵は収まりつつあったものの、日本は南極の座標に位置したままだった。東北のカリスマ――伊都淵の指示で丈は生まれ育った農園へと向かう。待ち受ける異形の脅威、氷のドームの建造、生存者の搜索と多くの使命を果たすには気弱過ぎる青年である丈を、農園の仲間達が、石田真由美が支える。次の衝撃波は襲ってくるのか？そして日本の未来は――

檻の中の惨劇（前書き）

エウロパの旅人——日本再生篇の連載を開始します。前作にはたくさん
さんのアクセスをいただき、大変ありがとうございました。本作も
お読みいただけます幸いです。

檻の中の惨劇

「気をつけてな」「誠に宜しく」 イッテラッシャイ と、口々にプラス意識にかけられた言葉に送られて僕は杜都市を後にした。全長6・3mの水バークラフトに積み込まれた荷物は液化ガスのタンクであったり農園に届ける食料であったりで、それらは7人乗りの客室を取り去った2/3を占めていた。

伊都淵さんと依子さんが作ったというホバーは、僅かな斜面や路面の凹凸さえもが障害となるエアクッションタイプとは異なり、地軸のずれにより安定した磁気を浮力と推進力に利用している。これなら非力な女性でも軽々と引けることだろう。しかし……

往路で救出を約束した石田さん一家をピックアップする予定のプランは、犬達に引かせた橇を僕が颯爽と先導するという構想であり、僕が犬の代わりをするのは計算に入っていない。井ノ口市を発った時同様、気の利いた台詞で杜都市の人々に別れを告げることが出来なかったのは、それが理由でもあった。

——忘れていた。氷の檻に閉じ込めたアイスギャングどもが居たではないか。奴等が改心していれば助け出してホバーを引かせればいい。妙案が浮かんで上機嫌となった僕は、鼻歌混じりにホバー先端に備えられた発電表示計を振り返る。船体全面に張り巡らされたソーラーモジュールの総発電量は0・4kw、磁性発生器を作動させるのがやつとといったところだった。明るくなつたとは言え、日射のないこの状況ではやむを得ないのだろう。

僕の脳味噌はイトペディア（伊都淵さんに詰め込まれた脳内ウィキペディア）で一杯になっていた。彼の言葉が蘇る。

——諸外国にも生存者は居るだろう。先進国ならトコロログリアに似たものを開発していたかも知れないし、立派なシェルターを持っていたはずだ。それでもあの衝撃波だ、生存者は多くて全人口の3パーセントといったところだろう。氷河期のようなこの気象条件

が、その数字を減少させている可能性もある。当面、他国からの援助は期待出来ない。君が一人でも多くの人を救うんだ。そして彼等が暮らしてゆける環境を作れ――

半月前までしがない小学校教諭だった僕が随分と大役を仰せつかってしまったものだ。だが、僕がやらねば誰がやる。そんな気になつていたのも確かだ。一步やマリアに速度を合わせる必要のなくなつた今、時速60km/hでの巡航が可能だった。予定通りなら往路の半分、三日もあれば農園に着く。母さん、そしてみんな、待つてくれ。僕は氷を蹴る足に力を込めた。

しかし、一人旅は寂しいものである。話し相手はおるか意識を遣り取りする相手もなしで4時間も氷を蹴り続けていると、人恋しさに気が狂いそうになる。そんなんじゃ長距離トラックのドライバーは勤まらないって？ 対向車もなければサービスエリアにもひとつこひとり居ない状況を想像してみるといい。4時間が10時間にも20時間にも感じられることを知るだろう。新潟中央ジャンクションのバンクも速度を落とすことなく駆け抜ける僕の胸には愛おしい石田真由美嬢の面影が……って、つい半月前に妻子を亡くした男の言う台詞ではないな。電子望遠鏡並みの視力を開放しても、氷の山々が邪魔をして彼女達を残してきた氷のホテルどこかアイスギヤングを閉じ込めた氷の檻にさえ視程は届かない。今日はここまでにしておこう。僕は氷でツルツルになった高速道路脇にホバーを寄せて電源を落とした。ソーラーモジュールをスライドさせた荷物に占拠されていない部分には低反発素材のマットが敷かれている。簡易ベッドは快適でソーラーの屋根を閉めれば風雪もしのげる。しかし寂しさは埋まることはなかった。

――脳細胞のひとつひとつを自分の分身として認識せよ――
つまり、生存本能を司る部分だけ起こしておいて体温調整と危険回避に努め、他の部分は休めろということだ。伊都淵さんから植え付けられた知識は就寝時に関する注意事項までこと細やかなものだった。

たった三時間程の睡眠で身も心もリフレッシュされた僕は、すこぶる快適に目覚めた。

—— 起きている時は不寝番を休ませてやること——

その言いつけを守るべく、生存本能組に休暇を与えてやる。彼は自分の脳細胞を何と呼んでいたっけ…… そうそうオイラーズだ。自分の脳細胞と語り合うなんざ分裂症患者に近いのではないかと、とボクラーズに問い掛ける僕が居た。何をかいわんやである。ともあれ今日中に石田さん一家を残した氷のホテルにはたどり着いておきたい。僕は出発の準備を始めた。

人間——今の僕がそう呼べるなら——文明などなくても生きて行けるものだ。脳味噌の使い方に精通するだけでいいのだから。遠くだって見えるしバイオナビ機能が目的地まで方向を間違えることなく案内してくれる。犬や熊とだって意思疎通を図れるし、人工筋肉なしでも相当な力を発揮することだって出来るそうだ（これまた伊都淵さんの知識だった）。ただ孤独は辛い。人が生きて行く上で一番大切なものは語り合い笑い合える仲間がいることなのだ、と僕は身に染みて感じていた。

とにかく退屈なのである。江戸時代の飛脚はよくもこんな孤独行に耐えていたものだ。石田一家の救出ありアイスギャングとの遭遇あり、そして高飛車な犬と母性本能の塊のような熊、彼等との会話があった往路とは打って変わって見事に何の変化もない復路だった。時間短縮のため速度を上げることも考えたが、ローラーブレードのベアリングが過熱して保たないだろう。高速道路の追い越し車線を、マイペースな婆さんの乗った車の後ろについて走るようなストレスを感じており、今やアイスギャングとの再会すら待ち遠しくて仕方のない僕であった。氷の檻までの距離は約80km、後一時間とちよいで到着する。

4kmほど先の氷の檻が見えてきた頃、僕を強烈な臭気が襲った。何だこれは？ アイスギャングどもが食い散らかした缶詰の始末を

していなかったにせよ、そう簡単に腐敗が進むはずはない。なにせ気温は氷点下なのだから。臭気には鉄臭さも混じっていた。堪え性のない若者達が食料を争って殴り合いでもしたのだろうか？ と、ほんの一週間程前まで彼等同様堪え性のなかった僕の緩い思惑とは裏腹に、頭に鳴り響くアラームは第一級の警戒警報を発令していた。

ひどい……血溜まりの中に五人のアイスギヤングが横たわっていた。凶器となりそうなものは空き缶のプルタブぐらいしかなかったはずなのだが、仰向けに横たわったのも俯せになったのも、その体からは内臓がすっぽりとなくなっていた。誰がこんな……想像もつかないほどの惨劇が氷の檻の中で繰り広げられたようだった。

その時——空気が動いた。

醜惡のハイブリッド

何だ？ 氷の丘——往路で、今や物言わぬ屍となったアイスギヤング達が姿を現したその丘の向こう、カシヤカシヤと耳障りな音が聞こえてくる。その音はこの手前4km地点で嗅いだのと同じ臭気と共に近づいてきていた。僕は氷の檻の上に立って音のする方に視線を向ける。ほどなくして丘の頂上に黒光りした体表を持つ十体ほどの何かが姿を現した。

熊でも犬でもない。強いていうなら日焼けサロンで焼き過ぎた人間が四つん這いに伏せたような姿勢でこちらの様子を伺っている。僕は気味悪さで全身が総毛立つのを覚えた。

——君は全身が武器だから——と、伊都淵さんから何の武器も与えられていなかった僕にとって、未知の生物との遭遇は混乱を招く意識を探ろうと送るどの周波数帯にも相手の反応はなく、強く感じるのは飢餓感と攻撃性のみ。本能のみが奴等の行動原理となっているようだった。

ボクラーズに脳内検索を託すとイトペディアが起動する。昆虫——アレが？ 昆虫といえばカブト虫か蝶といったほのぼのとした種目しか思いつかない僕にとって、目の前の醜惡な存在がどうにもイメージと重ならない。ボクラーズが次なるイメージを提起してくる。ゴキブリだって？ しかし丘に伏せた奴等の顔らしき部分は人間のそれで、微かに聞こえる呼吸音に合わせ黒く隆起する背中が上下している。気門から酸素を取り込む昆虫類は絶対にそんな呼吸法はしない。

『ハイブリッド』『トランスジェニック』立て続けに二つの単語が転がり出てきた。

人間にゴキブリの遺伝子導入がなされたのか——信じられないがそうとしか考えられない外見だった。薄明かりの中、奴等はいじめわとこちらに向かって移動を始めた。体表を鈍く光らせて。敏捷

さがゴキブリほどでないのは膂力が人間のそのままなのか。外骨格動物では有り得ないサイズを実現するため、そして肉体の統合性を保つために全ての遺伝子情報を取り込めなかったのだらう。ついでに奴等が飛べないのも確信した。四足歩行をする奴等の背中に上翅は見当たらなかったのだ。

のんびり生物学の講義をしている場合ではない。何せ第一陣が移動を始めた途端、丘の上には同数の第二陣が準備を整えていたのだから。どれだけ居るんだ奴等は……ええいままよ、ゴキブリならこれで撃退出来るだらう。僕は声帯域を通る音波を23000Hzに固定した。

人間ゴキブリ——ゴキブリ人間？ この際どっちでもいい。一瞬間ゼンマイが切れたように動きを止めた奴等はそそくさと後退を始める。よく見ると腕にあたる部分のすぐ下辺りから一対の節足状のものが生えている。どこの誰があんなデタラメな生き物を作ったんだ……第一陣の撤収が始まると丘の上にあつた陣形も姿を消していた。統制はとれているようだ。微かだが意識に引っかけた脳波の残滓らしきものを解析する。なんと漢字が混ざっているではないか、奴等はメイド・イン・チャイナだったのか……

莫大な政府財務を抱えながらもプライドだけは高いアメリカが、例え生き残るためとはいえゴキブリの遺伝子導入などするはずはない。あの恥知らずな將軍様の居た特異な思想の国にそれほどの科学力はない。ギリシャに始まった財政破綻が蔓延していたEU諸国にも無理だらう。オイルはふんだんにあるが専らテロにご執心だった国々は宗教には従順だ、遺伝子操作は神への冒瀆、蔑むべき行為だと認識していたはずだ。伊都淵さん流消去法が奴等の正体を明らかにしていた。

『事実は小説より奇なり』とはよく言つたものだ。デイ・アフター・トゥモローにもウォーカーにも、こんな奴等は出てきやなかった。まったくあの国の強欲さと来たら底なしだな、世界中の資源を買い漁るだけでは彼等の欲望は満たされなかったというのか。ああまで

して生き残ろう、世界の支配者たろうとする彼等にとって、この氷で閉ざされた世界で一番大切な資源は食料となったのだろう。それを求め氷で繋がってしまった海を渡ってきたのか。

その昔、父さんはいっていた。祖父が少年だった頃、島国日本は自国にない資源を確保（略奪）しようとして中国に攻め行ったそうだ。有史以来、人類の歴史は侵略と被侵略が繰り返されてきた訳で、今回はたまたま中国が侵略者となっただけのことなのだろう。なんだから僕は物分かりのいい好々爺になってしまったようだ。

——いけないっ！

僕は石田さん一家のことを思い出した。伊都淵さんの言うとおり地球上の人工のたった2／3パーセントが生存者だったとしても、それが中国なら2600万人が生存している計算になる。そのうちのどれだけが人間ゴキブリとなり、どれだけがこの国に渡ってきているかはわからない。だがあの様子なら目にした生存者を手当たりしだいに食料に変えていただろう。四本足は机以外、空を飛ぶものは飛行機以外何でも食べるという悪食この上ない民族なのだ。僕は氷の檻を飛び降りて先を急いだ。希望と秩序の明かりが灯り始めたこの氷の台地に、嵐の予感を感じ取っていた。

Optimist (樂天家)

遅かったか……

駒ヶ岳サービスエリアに作った氷のホテルの中に人影はない。僕は落胆に肩を落とした。多少、時間はかかっても彼等を同行させていれば……悔恨は尽きることなく僕の胸に溢れてきた。氷の檻で見たような血痕はなかったが、積み上げられていたはずのダンボール箱は散乱し、中身のなくなった缶があちこちに放り出されている。

「血液型は整頓好きのAだ」といった真由美さんとその母親が居て、この散らかりようはない。組織的に襲撃を仕掛けてきたゴキブリ人間どもの数を思い出す。人の良さそうな父親だけが男性のパーティーでは、奴等の急襲に為すすべなく保存食として連れ去られたと考えるのが自然だった。僕の背中が見えなくなっても手を振り続けてくれた真由美さんのチャージミングな顎のホクロが記憶の中でクロースアップされていた。

僕は、はたと気づいた。緊急避難用にと石田一家に教えておいた、掘り起こし放置されたままの地下タンクがあったはずだ。一縷の希望に縋って氷のホテルの裏手へと回った——誰かひとりだけでも助かっていてはくれないものかと。

「石田さん、居ませんか？」

加減して叩いたつもりだが屋外に放置され錆の吹き出した地下タンクは大きく凹んでしまふ。耳を済ませてみるが反応はない。僕はもう一度肩を落として回れ右をした。その時だった。常人の感覚では捉えられないほど小さな空気の揺れを感じた。タンクに登って点検口に被せられた直径50〜60cmほどの蓋を開くと、聞き覚えのある涼やかな声が僕の耳に届いた。

「小野木……さん？」

「そうです。ご無事でしたか」

真由美さんの心細げな顔が僕の照らすLEDランプの中に浮かび

上がる。彼女は手をかざし、顔を横に振った。残念ながら眩しかったのは僕の笑顔ではなかったようだ。

「ご両親は？」

「寝てます」

僕は円筒形のタンクから滑り落ちそうになった。この状況でよくも寝ていられるもんだ。しかし何故ここに？ 緊急用とは告げてあったがゴキブリ人間どもが襲ってきてからでは、ここまで逃げてくる余裕などなかったはずだ。そのままの疑問を真由美さんにぶつける。

「世界がこんなになっちゃったのに、お父さんったらビールを飲みたがって仕方なかったんです。最初のうちは母も大目に見ていました、そのうち1本が2本になりで……」

石田博氏が無類のアルコール好きだったのは救出した時の様子から分かつてはいたが、死んだ父同様、さほどアルコールに強くない僕に、所謂？大酒飲み？の気持ちは理解出来ない。

「怒った母がビールの箱をタンクの中に放り込んだんです。そうしたら父は、万が一のためにタンクに入れるかどうか試してみよう、と言い出して――ほらあの体型でしょう？」

確かにあの立派なお腹がこの狭い通路を通り抜けられるかどうかの不安はあったろう。だが彼の目的が他にあったのも疑いようのない事実だ。

「それで？」

真由美さんが奥で眠りこけているはずの両親の方をちらと見やる。バツが悪そうな顔をしていた。

「入ったはいいけど出られなくなってしまったんです。タンクの中はとっかかりになるものも何もなくって。それで小野木さんが戻ってくるまで、そこに居なさいって母が……」

「ええ、でも真由美さんとお母さんまで中に居らしたのは何故ですか？」

「父を引っ張りあげようとしたんです。でも小柄な母やあたしでは

……」

そう言うとき真由美さんはペロリと舌を出した。重量級の父親を引っ張りあげようとして結局、二人とも引っ張り込まれたしまったという訳か……漫画みたいな一家だな。僕は思わず声を上げて笑ってしまった。彼女も釣られてエヘへと笑う。タンクの奥からは大小二種類の鯨が聞こえてくる。この一家なら大抵の災害は乗り切ることが出来ただろう。

食料なし、ビールのみで六日間のタンク生活を送る羽目となった石田さん一家は、コンビニの店内から救い出した時同様、旺盛な食欲を示した。ホバーの上で胡座をかいて缶詰を頬張る石田博氏の姿は、杜都市で別れたマリアを彷彿とさせた。

「すると、杜都市には大勢の生存者が？」

「そうです。これから行く中ノ原市にも氷のドームを作る予定ですが、完成には約一ヶ月を要します。どちらに住まわれるかはご家族で協議してお決めになって下さい」

「そりゃあ先に工事に着工している杜都市だろう。東北のカリスマが居るならなにかと安心だし」

「でも、それだとまた小野木さんに迷惑をかけちゃうんじゃない？」

博氏の奥さんが僕の方を見て言った。

「次の東北行きが僕の担当になるのかどうかは分かりません。伊都

……東北のカリスマの判断に委ねてありますから」

「じゃあ、あなたはどこに？」

「は？」

真由美さんの問い掛けに僕はドギマギしてしまった。「あなたと一緒に居たい」と言われた訳でもないのに、だ。特段目立った容姿ではない。スタイルも梓先生のようなモデル並みといった風でもないのだが、初めて見た時から僕を魅了して離さない何かが彼女にはあった。「慌てて結婚なんかするんじゃないぞ、遺伝子が求め合う女性が必ずどこかに居るからな」小学生だった僕に父親が言った言葉が蘇っていた。

「ええっと、ですからカリスマ次第なんですが、ドームの建造がある程度進むまでは多分農園、中ノ原市に居ることになると思いまふ」

素敵なお姉さまの前で萎縮するチェリーボーイ同然となった僕が慌ててそう付け加える。何やら発音まで怪しくなってしまうている。真由美さんはふつと唇を緩めて言った。

「じゃあ決まりね。命の恩人にお礼らしいお礼も出来ていないんですもの、何かお手伝いさせてもらわなきゃ。いいでしょ？」

水を向けられた彼女のご両親は、なるほど、といった感じでこくりと頷いた。真っ直ぐに見つめてくるやや吊り目がちな彼女の瞳に、僕は吸い込まれて行きそうになった。

合流

「大丈夫？ 辛くないですか？」

真由美さんが心配げに声をかけてくる。恐らく僕が口を開きつばなしだったせいだろう。しかし僕は4コーナーを抜けて最後の直線に入った馬ではない。ゴキブリ人間どもを寄せ付けないがために23000Hzの音波を出しながら疾走していたのだ。彼女にはそれが苦悶の表情に見えたのだろう。

「ホバーは浮いてますからね。引つ張り始めだけですよ負担を感じるのは」

とは言え大人三人、しかも博氏は重量級である。常人なら巡航域に入るまでに相当の時間と体力を要したことだろう。しかし好意を抱く女性に「僕は、いざとなれば数トンの力を出せるバケモノですから大丈夫」などと誰が伝えられよう。どのみち僕以外がこれを引くことのない限りバレル心配はないのだ。石田さん一家の目には？ 頼り甲斐のある力持ちの青年？ としか映らないはずだった。例えば女性用のハーフコートを着ていようと。

しかし時速60km/hで口を開けての疾走は喉が乾く。30分置きに足を止めて水分補給をする必要があった。ホバーの上で缶ビールを溶かしながらチビチビとやっている博氏のお気楽さが羨ましい。少々、呂律も怪しくなっていた。

「遠いから？ そろ農園とやらは」

後ろを振り返っている訳には行かないし窓の閉まった車でもない以上、返事をしたところで、博氏に届いたかどうかも疑問だ。聞こえなかったふりをして真由美さんにだけ届くよう短く意識を送った。「一時間弱つてとこじゃない？ あれ？ 何であたしそんなこと知っているんだろう」

上手くいった。こうやって彼女の気を——いけない、いけない——いい人間に意識操作をしてはならない。それは伊都淵さんの厳命

だった。

ほぼ予定通りに中ノ原インターチェンジを降り、かつてバイパスだった道を農園へと向かう。八歳の時に離れて以来、およそ十五年ぶりとなる農園だった。少し雲が薄れた程度では昔の面影を期待することは出来ない。何せこの国は南極だった座標に位置しているのだから。トコログリアがなければ生きて行くことすらままならないのが現状なのだ。

木々は衝撃波でなぎ倒されていたか凍りついていたが、見覚えのある地形が標準視野の中に入ってきた。車道側から登って行けば母屋のあった場所がシエルターの入り口になっていると、雄さんは衛星電話で告げていた。

「ここです」

真由美さんと石田さんの奥さんが丘陵の頂を見上げる。僕は最後の難関たる緩斜面——とは言え五分の一勾配である——を登ろうとするのだが車道の始点は大きくUターンしていて助走がつけられず、20m程登っては滑り落ちてしまう。僕は仕方なく四つん這いで登ることにした。やれやれ、これではゴキブリ人間と同じではないか。手伝いを申し出てくれない石田博氏は大層をかいでいらつしやった。

到着を知らせるべく鉄の扉を氷の塊で叩く。何だか原始人になったような気分だった。跳ね上げ戸がギリギリと開き始め、警戒に目を光らせた雄さんの浅黒い顔がのぞいた。

「丈か！ 無事だったんだな。おいみんな、丈が戻ったぞー」

未だかつてこんな嬉しそうな顔をする雄さんを見たことがない。有名なボクサーだった彼は、いつもストイックに心身の摂理を追い求め、カジさんが乗り移ったかのような無表情でトレーニングに励んでいるものだ。なにも宇宙旅行をしてきた訳ではない。東北の、青森よりずっと近くの杜都市を往復しただけだ。平時なら何でもなような事を飛び上がらんばかりに喜んでくれる雄さんに、僕は胸

に熱い物を感じていた。

杜都市程ではないが、かなり大規模なシエルターだった。ここにはどれだけの生存者が居るんだろう？母や生徒達は元気にしているだろうか。ゴキブリ人間の気配がないことを確かめて石田さん一家をホバーから降ろす。寝ぼけていたのか酔っ払っていたのか、博氏は僕をタクシーの運転手と勘違いされたようで「幾ら？」と訊ねて胸ポケット辺りを探っている。財布でも探していらしたようだ。

僕は雄さんの案内でシエルター奥の区画へと進んだ。涙で顔をぐしょぐしょにした母、懐かしい誠さんと剛さんの顔、無事だった子供達とスーザンの歓待に僕は涙が出そうになった。

「じゃあ、ここにも？」

「ああ、シエルターの扉を開けるまでの知恵はないようだな。今のところ誰も襲われてはいない。奴等が最初に姿を見せたのはお前が杜都市を脱った後だった。道中のお前に連絡を取る方法がなくなっ

て心配していたが無事で何よりだ。アレは一体なんなんだ？」

「伊都淵さんに詰め込まれた知識を借りての推測ですが、中国が人体にゴキブリの遺伝子導入を行なったんだと思います。ただ、あれは失敗作ですね。えらい中途半端なところで融合が終わっていましたから」

母達の歓待もそこそこに、僕は雄さんに呼び出されてシエルター入り口右手にある区画に居た。色々と報告せねばならないこともあったし、雄さん達は雄さん達でゴキブリ人間の情報を欲しがっていた。

住人が増えたのと女性も居るということで誠さんが間仕切りを作り、ワンルームだったシエルターを区分けしたのだそうだ。誠さんの手先の器用さは僕がここに住んでいた頃から農園スタッフの中でも抜きん出ていた。そして何を隠そう僕は不器用この上ない。太くて短い指で器用に道具を操る誠さんに憧れたものだった。そんなどうでもいい回想にお構いなしで雄さんは続ける。

「杜都市には、まだ奴等は現れていないそうだ。だから伊都淵さんの所見も聞けていないのが現状だ。丈がそう判断したのなら間違いないだろう」

「だけど、あんなのが居たらドームなんて作れないじゃないか」

それまで黙っていた誠さんが割って入ってきた。確かにその通りだが、手先の器用さではカジさんに勝るとも劣らない誠さんである。伊都淵さんに設計してもらえば音波発生装置ぐらい作れるのではないか？ 僕はそれを提案をする。

「ははあ、デカくなるうが人間と混ざろうが嫌いな音波に変化はない訳か。よし、作ってみよう。雄、次の連絡をする時に伊都淵さんに聞いておいてくれ」

誠さんが腕ぶす。

「バイナリ地熱発電も見直す必要があります。それとドームを作るにはバイオ流体緩衝材も大量に必要となります。こちらでも培養するようにとの伊都淵の指示です。培養槽と胚はホバーに積んであります。ドーム建造の工程表とガスタービン発電機の設計図も預かってきています」

僕は銀色に輝くUSBメモリをポケットから取り出して誠さんに渡した。

「ガス容器はホバーにあります。途中でスーパの配送トラックから失敬してきた食料もそこに。取ってきます」

「手伝おう。おいっ」

奥に控えていた男性四人を伴って、僕は再び氷の世界へ続く階段へと向かった。少しだけ気になったのは剛さんの元気のなさだった。

「出来そうですか？」

音波発生器の設計部が描かれたパソコン画面を眺める誠さんの背中
中に声を掛ける。

「発振器そのものは何とかなりそうだ。デカイスピーカが欲しいな」
「その辺りに転がっている車から拝借してきましょう。他に必要な

ものは？」

「カーオーディオやナビがあれば集めてきてもらうと有難い。半導体は用途が多いからな。反響板を作るのに金属のパネルも欲しい。倒れた看板や車のボンネットを剥がしてきれくれ」

「わかりました」

「簡単にメタンハイグレートの鉱床が見つければいいが、楽観は出来ない。プロパンガスの容器も探してみてくれ」

どちらかといえばのんびり屋だった誠さんも真剣な目になっていた。

「了解です」

大き過ぎてシェルターに運び込めなかったガス容器は屋外に放置してある。培養槽は分解して持ち込んだものの、どの区画も狭くて入りきらない。屈強そうな（あくまでも一般人のレベルとして）男性達が仕切り板を外して手前二つの区画を繋げる作業をしている。僕は雄さんに訊ねた。

「所教授と梓先生は連れてこなかったんですか？」

「このシェルターには設備がないってことでラボに残られたよ。衛星電話はあっちにも置いてきたが、屋外でないと繋がらない。余程の事態でも起きない限り、奴等が居る可能性のある外には出て欲しくない。同じ理由でこちらからの連絡も控えている」

「僕が行って連れてきましょうか？ 櫓とホバーがあればある程度は機器も運べると思います。犬達は借りられますか？」

「そうすべきなのかも知れないが……伊都淵さんに相談してみよう。丈は少し休んでおくといい」

なるほど、最初から飛ばし過ぎて息切れしてしまうのがないということか。休める時には休んでおこう。僕は歓待の仕切り直しのため、広く仕切られた奥の区画へと向かった。ちなみにこれは洒落ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921y/>

エウロパの旅人—日本再生篇

2011年11月4日07時07分発行